

「砂の器」 原作…松本清張

脚本…野村芳太郎 橋本忍 山田洋次

13 東京・国鉄蒲田操車場

こくへつのかまたそうしやじょう
夜はまだ明け切れない。

線路の上にくつつ伏せになっている死骸。

タイトル

《事件発生は、昭和四十六年六月二十四日、早朝。

場所 東京国鉄蒲田操車場内》

——現場の遺留品「バー・ロン」のマッチ

15 西蒲田署の捜査本部

被害者の立ち寄ったバー・ロンの従業員Aが、事情聴取を受けている。

係長「入って来たのは十時から、十時半の間ですね」

A 「はい」

係長「どうして東北弁だということが分かりました？」

A 「言葉の調子がズー弁とでも言うのか…」

係長「言葉に訛がある？」

A 「はい、ひどい訛がありました」

16 バー・ロン

さして大きくない。

係長「二人がここを出たのは、十一時ちよっと前だね」

バーテン「そうです」

係長「水割りのお代りを三度したきり、二人でズウーッと話し込んで

た…：年配の男が若い男へ、熱心に何か話し込んでいた」

バーテン「そうです」

係長「その二人の様子はどんな間柄に見えたかね。商売上の取引きとか、

友達同士とか、はっきりした内容でなくていいんだ、何か一言だけで

も覚えていることはないかね」

バーテン「そうですね…：ああ、確かカメダとか」

係長「カメダ？」

バーテン「はい、二三次そういう言葉が…：カメダはどうしたか、カメ

ダは変わらないとか」

係長「カメダ？ カメダに間違いないね」

バーテン「はい、間違いありません」

19 西蒲田署・捜査本部

捜査本部は東北各県の協力で六十数名の“カメダ”の名前の人物を捜査したが被害者に繋がるものはなかった。

係長「そのカメダという名前だが人物を東北地方に限定するのはまずい

のかもな。二人の共通の友人なら、何も東北地方とは限らない。東京の者かも知れないし、逆に東京より西に居住きょじゅうしている者かも知れない」

今西「あの……その、カメダと言う名前ですが……カメダはどうした、相変わらずかなどと言っておりまして……人の名前を指しているようにも聞こえますが、これを土地の名前に当てはめても、おかしくはないような」

一同の視線が今西に集まる。

今西「この間からそんな気がするものですから、昨日きのう、本屋の店先で何気なく鉄道地図を見ていたら」

係長「カメダと言う土地が？」

今西「はア」

係長「どこだ、そこは？」

今西「秋田県です」

係長「(思わず若い刑事に) おい、分県地図ぶんけんちずを持って来いッ！」

※ 捜査本部は秋田県の岩城署いわきしよに問いあわせる。

結果、亀田町の朝日屋旅館あさひやに怪しい男おとこが泊とまって居たとの連絡があり、今西、吉村刑事が捜査に向かうが……手がかりなし。

吉村「このままノコノコ手ぶらで帰るなんて……」

今西「捜査本部のみんなに申し訳ないな、秋田までやって来て何の手土産てみやげらしいものがないんだから……東北弁のカメダか」

40 警視庁・表玄関の階段

一人の男(女)がオズオズ上って来る。

タイトル

《八月九日、事件は突然思いがけない展開をした》

《被害者の息子(娘)が現れたのである》

41 同・一課の部屋

ズボン、シャツ、靴、等々の遺品いひんを見ている息子(娘)。

その朴訥ぼくたくな顔かたが硬く強張こわばってっている。

傍かたわらに係長と今西。

係長「間違いないですね」

息子(娘)「はい」

係長、被害者の写真を見せる。

息子(娘)、見た途端とたんに呻うめき声を上げ顔をそむける。

係長「間違はなく、お父さんですね」

息子(娘)「は、はい……お伊勢参りに行くと行って出かけたきり、帰って来ないんです。気ままな旅行を……と言っていましたから、最初のうちは別に気にもしなかったんですが、かれこれ五十日近くにもなるし……妻(夫)や伯父おじと相談の上、警察へ捜査願さうさがんいを出しました。する

と東京の警視庁から照合しょうごうが来ているが心当たりがないかと言って、人相にんそう書きの写真を……それが父親ちちに似にているものですから、慌あわてて」

係長「ご住所は岡山県英田郡江見町ですね」

息子こ(娘)「はい、江見町字江見二十一番地です。父の名前は三木謙一、

私は彰吉しょうきち(彰子)と申します」

係長「お父さんのご職業は？」

彰吉(彰子)「雑貨商ざっかしょうを営んでおりました」

係長「あなたがご長男(長女)ですか」

彰吉(彰子)「は、いや、私は養子(養女)です」

係長「？」

彰吉(彰子)「父は子供がありません。私は店員やとで雇やとわれていたんですが、

父の希望で養子(養女)になり、同じ町内から妻(夫)を迎むかえました」

係長「すると、取婿とりむこ、取嫁(取嫁)という訳ですね」

彰吉(彰子)「はい、そういう訳で、一、二年前から私達夫婦に殆ど店を

まかし切りにして、ま、隠居いんきょのような身分みぶんでした」

係長「(頷うなづき) お伊勢参いせまりと言って出でかけられたそうですが」

彰吉(彰子)「かねがね一度お伊勢様に参りたいと口癖くちぐせのように言ってお

りました、今年の六月の初め、それをかねて、のんびり旅行をした

いと申しましたので、私達夫婦も賛成さんせい致いたしました」

係長「家を出られたのは？」

彰吉(彰子)「六月十日です」

係長「お金はどのくらいお持ちになって？」

彰吉(彰子)「確か十二、三万円だったと思います」

係長「それ切り、何の連絡もなかったんですね」

彰吉(彰子)「いえ(鞆たるから、絵葉書を二通取り出す)これが琴平こひら、これ

が伊勢からです」

係長「(受取うけとって見る) 琴平……四国の金毘羅こんびらさんですね」

係長、黙読もくどくする。

そして、もう一通を黙読して変な顔になる。

係長「京都、奈良を廻まわって、念願ねんがんの伊勢に着いた。二泊にぱくぐらいして、真

つ直ぐ江見えみの帰る……？」

彰吉(彰子)「はい、」

係長「これだと東京へは……東京には他に何か要件ようけんが？」

彰吉(彰子)「いいえ、そんな筈は、どうして父が東京へなぞやって来た

のか、私にはそれがさっぱり？」

×

今西が係長に替かわって訊きいている。

彰吉(彰子)「カメダ？」

今西「そうです。お父さんの知合の人に、カメダと言う人はいませんか？」

彰吉(彰子)「(暫しばく考えて) いいえ、おりません」

今西「ない？」

彰吉(彰子)「はい、」

×

×

今西「それじゃ貴方の住んでおられる岡山県の江見町の近くに、カメダ
と言う土地に心当たりはありますか？」

彰吉（彰子）「（首をひねる、だが直ぐ）ありません」

今西「三木さん、これは大事なことです。よく考えてください。カ
メダという人か、土地に心当たりはありますか？」

彰吉（彰子）、真剣な顔つきで考え込む。

今西、じつと答えを待ち受ける。

彰吉（彰子）「そういう人も、そういう所も……私には全然」

今西「心当たりがない」

彰吉（彰子）「はい」

今西、思わず係長と顔を見合す。

今西「三木さんの生れはどこでしょう？」

彰吉（彰子）「現在住んでおりました、江見の在です」

今西「もしかしたら、お父さんは東北弁で話されるといふようなこと
は？」

彰吉（彰子）「（吃驚する）いいえ、そんな、東北弁なんて」

今西、係長、また顔を見合す。二人共、心中の動揺はかくせない。

今西「藁でも取継るように」それじゃですね、一時的にでも、お父さん
は東北に住んでおられたようなことは？」

彰吉（彰子）「（訝しげに）いいえ、学校を出るなり、島根県で巡査をし
ておりまして、退職と同時に生れ故郷の江見に帰り、商売を始めた
ものですから、おそらく東北なぞへは、一度も行ったことはないと思
います」

係長が再び気を取り直して訊いている。

係長「つまり、お父さんに恨みとか、敵意を持つている人です」

彰吉（彰子）「絶対にそんな人はいません。実に面倒をよく見るたちで、
誰からも尊敬されておりました」

係長「しかし、さっきうかがったところでは、島根県で警察官をなさつ
ていたようですが、ま、警官というものは、いろいろの人間に知り合
いや繋がりが出来るものです。何かその時にでも……」

彰吉（彰子）「私は養子ですから昔のことはよく存じません。しかし、父
に限って、そんな……私の口から言うのは変ですが、父は実に立派な
人間でした。誰からも後指を差されるようなことは、これは調べてい
ただければ、よく分かると思います」

窓の外に黄昏が迫り、部屋の中は薄暗い。

係長と今西、向かい合って煙草をふかしている。

三木彰吉（彰子）はもういない。

係長「何もかも振り出しだ、えらいことになったね」

今西、黙っている。

係長「（慰める）ま、しかし、被害者の身元が割れたのは、大きな一歩

だよ」

今西「しかし、東北弁の……？」
係長「今西君、君はまだカメダに未練があるのかい」

45 国立国語研究所

古びた白い建物で「国立国語研究所」の看板がかかっている。
今西、看板を確かめて中へ。

46 同・応接室

国語学者の桑原に、今西が向かい合っている。

桑原「東北弁が東北以外の地域で使われるかどうかですな」

今西「は、もしそういうことがあればと思ひまして」

桑原「(微笑) それはありませんね」

今西「は？」

桑原「東北で使われるから東北弁で、強いて言えば、北海道の開拓地などで、東北の一村がそのまま移住した場合には使われているが、ま、この程度のことでしょうな」

今西、ホーツと溜息をついて頷く。

桑原「しかし、音韻が類似している地方はありますよ」

今西「音韻と言いますと？」

桑原「発音の仕方、特に言葉の響きですね」

桑原、書棚の方に行く。

桑原「例えば、駅売りの呼声ですが、お寿司に新聞を、オスにスンプンと言うと、関東じゃ東北の人の悪口です。しかし、関西から中国地方にかけては、出雲地方の人達の悪口になりますね」

今西、思わずハツとする。

桑原、取出した本を持って来て机の上に広げる。

桑原「つまり、ズーズー弁は東北を意味しますが、出雲地方の一部には非常によく似たなまりがあるンですな」

今西、息を殺して桑原の広げた地図を見る。

桑原「これがその音韻図です。ホラ、島根県のこの出雲の……」

その地図。東北四県が赤く塗り潰され、それ以外の日本列島では、島根県の一部だけが、同じ赤で鮮やかに色づけされている。

47 本屋の店頭

今西が地図を捜している。

49 喫茶店

今西、溶けかけているアイスクリームに手も付けずに、広げた地図に喰い入り、一字一字、丹念に活字を追っている。

その今西が息を止め、眸が一点を凝視したまま動かなくなる。
穴道湖畔から、中国山脈に分け入る木次線。その深い山肌の中にあ

50 大衆酒場（夜）

片隅のテーブルで今西、ニコニ吉村にビールを注いでいる。

吉村「今西さん、今日はどうしたんですか？」

今西「いいから、呑んだ呑んだ」

吉村「そんなにいい話なら早くしてくださいよ」

今西「（にっこり）……実はね、被害者と東北弁の関係がトレたんだ」

吉村「え？ ホ、本当ですか!？」

×

×

×

テーブルの上に広げられた島根県の地図。

吉村、興奮して覗き込んでいる。

吉村「亀嵩と読むのかな」

今西「国語研究所の桑原さんに念を押すとね、亀嵩かも知れないが、そ

れはどっちでもいいインだって」

吉村「は？」

今西「ズーズー弁は語尾がはつきりしないのが特徴なんだ。亀嵩にして

も、亀嵩にしても、ズーズー弁の人が話していると、我々にはカメダに

聞こえるそうだが、カメダにね、ハハハハ」

吉村「（顔を輝かす）お手柄ですね」

今西「いや、その上にだよ、今日島根県の県警から回答があつてね、被

害者の三木謙一は島根県で巡查をしていたんだ。この亀嵩を中心に二

十年近くもね」

吉村「うーん（思わず唸る）……で、島根のほうにはいつ？」

今西「明日の晩、夜行の急行だ」

吉村「僕も行きたいなア」

今西「今度はね、ホシを捜したり、取ったりするんじゃないし、調べだ

からな」

吉村「いや、仕方がない。諦めます」

今西「東北へは贅沢な旅行をさせて貰った代わりに、今度は手土産を、

きつと何かおいしい手土産をな、ハハハハ」

51 山陰線・余部の鉄橋

朝、遠景。

特急、松風、通過している。

タイトル

《東京を出て十一時間》

《特急、松風で山陰路に入り、余部の鉄橋を越える》

※ 群青の日本海——広大な伯耆大山を背景に松風は山陰路をヒタ

走りに走る。

・山陰本線から別れ発車する千鳥号。

- ・山また山、奥出雲の山峡。おくいずも さんきやう
- ・流石さすがに今西の疲労の色は覆おほうべきものない。

60 出雲三成駅いずもみなり

今西、改札口で切符を渡している。

タイトル

《東京を出て約二十時間》

《しかし、夏の陽はまだ高い》

今西、駅を出て来て辺りを見廻す。

——三森警察署みなり 入って行く。

63 同・署内・署長室

署長「しかし、古い話ですな、もう二十年以上も前のことで、署員しよいんの中
じゃ三木さんを知っている者はもう誰もおりません。ですから今日は
かつての同僚、退職者たいしょくしゃに二、三来て貰もらいました」

今西「は、どれはどうも」

※今西、退職者数人に当時の三木の話いってんひを聞くが一点非ひのうちどこ
ろのない立派な警官であったことを知る。

今西はさらに亀嵩の町を訪ね三木と最も親まじりしかった桐原老人と
会う。

74 桐原家

桐原、かなり強いズー弁べんでぽつりぽつりと語っている。

桐原「腰の低い、人柄ひとがらの穏おだやかな人でしたなア。とにかく、出来過ぎる程ほど
の人で、この駐在ちゆうざいであれだけ村の人に慕したわれた方はおりません。全く
神も仏もないものかと思えます。洪水こうずいで溺おぼれかけた女子おなごを命がけで助
け、火事の中から赤ん坊を救い出し……そんな話は数えたらキリがな
い。ああ、それからこういうこともありましたなア、子供連れの哀あわれ
な乞食こじきが村にやって来たので、病気の父親を病院に送り、その子供の
面倒めんどうを見たり……全く欲得よくとくを離はなれたお方でした」

タイトル

《亀嵩に二泊し、桐原老人以外にも十七、八名の人に会った。

しかし、その人々の話は、被害者をまます正義感の強い、
模範もはん的な警官に実証じっしょうするばかりである》

《——殺人の動機は、この奥出雲の地には、何一つない》

※今西は何の手懸てがりもつかめず東京に帰る。

91 大衆酒場

今西、吉村と呑んでいる。

今西「(ポツンと)伊勢へ行ってみたいなア」

吉村「は？」

今西「三木謙一はどうして東京へ……どんな用事があつて……彼の予定には東京行きはなかった……伊勢に着いてから、どうして急に……」

吉村「それは今西さん、息子には何か言えない事情が」

今西「いや、彼の人生にはそんな暗いものはないね」

吉村「じゃ、一体？」

今西「誰か思いがけない人に会つたか、それとも……いや、その辺りのことはよく分からんが、何にしても伊勢へ一度……しかし、これまでに東北山陰と、土産のない出張ばかりしているから、ちよつと切り出しにくくてね」

98 参宮線・二見浦駅

駅の建物から今西、出て来る。

タイトル

《東京より新幹線を名古屋で乗換え、関西線、紀勢本線を経て、伊勢市二見浦駅に着く》

《休暇を利用して実費の旅である》

99 旅館・扇屋

100 同・帳場

開かれています宿帳。

【現住所 岡山県江見町

職業 雑貨商

氏名 三木健一】

向かい合つて一寸不安げな顔つきの主人。

今西「最初は東北の人かと思つたんですね」

主人「はい、そういう風な訛りがありました」

今西「着いたのは六月十九日。何時頃ここへ？」

主人「もう夜でした」

今西「夜ね」

主人「お食事は済んでおりますかとお聞きしましたら、未だだとおつしやいましたので用意しました」

今西「食事が済んでから外出でも？」

主人「いいえ」

今西「誰か人が尋ねて来ませんでしたか？」

主人「いいえ、どなたも」

今西「翌日は？」

主人「(考えて) はい、内宮さんと外宮さんへお参りになり、鳥羽までお廻りになつたそうです」

今西「鳥羽までね」

主人「はい」

今西「帰って来た時の様子は……途中で誰かに会ったとか、そういうふうなことを言ってみせませんでしたか？」

主人「(考えるが思い出せない)さー」

今西「三木さんはその晩もここに泊ったんですね」

主人「はい」

今西「夜は別に変ったことは？」

主人「映画にいらっしやいました」

今西「映画？」

主人「退屈だから映画でも観に行く。映画館はないかと言われたので教えました」

今西「帰りは？」

主人「そんなに遅くならなかったと思います」

今西「それからは誰も尋ねて来ないし、電話もかかって来なかったんですね」

主人「はい」

今西「二十一日はどうでした？」

主人「朝、九時二十分の汽車でお帰りの予定だったので、八時に朝食を出しました。すると急に予定を変えた、夕方までいるとおっしゃいますして……」

今西「急に予定を変えた？」

主人「はい」

今西「で、夕方までどこへも行かずにここで？」

主人「いいえ、昼過ぎに出られました」

今西「どこへ？」

主人「映画です」

今西「映画、別の映画館へ？」

主人「いえ、前の日と同じひかり座です」

今西「すると、同じ映画を、またもう一度？」

101 ひかり座・支配人室

古びた扇風機がガタガタ音を立てて廻っている。

微かに上映している映画のせりふや音楽の音。

今西、支配人の話を手帳に控えている。

今西「『利根の朝霧』と『男の街』ですね」

支配人「ええ、その二本立てです。(机の中をゴソゴソやりながら)おい、

みえちゃん、何か冷たいものを」

今西「いやいや、お構いなく」

支配人「あつたあつた(プレスシートを二枚取り出し)これが『朝霧…

…』、こつちが『男の街』、大体の筋書きが出てますがね」

今西「どうも……(受取る)ほう、俳優さんの名前も」

支配人「せりふのある役者は一応ね」

今西「このフィルムですが、それは東京の本社にでも行けば」

支配人「ええ、全国を廻りますが、用がなくなると本社の倉庫へ……（急に興味ある顔をする）あの、事件に何か関係が？」

今西「いや、一寸した参考程度のことです……あの、六月二十一日はどんな映画を上映していたのですか？」

支配人「六月二十一……あッと、土曜日だな」

今西「は？」

支配人「二十一日から変わってますね、『北海の嵐』と『大江戸の鬼』です」

今西「え？（思わず声を上げる）すると六月の二十日と二十一日の映画は違う！」

支配人「（怪訝そうに）ええ、違います、うちは写真が土曜日変りになってましてね」

今西、茫然とまるで棒を飲んだように突っ立っている。

その今西の背後の壁に重厚端正な前大蔵大臣田所重喜の写真が飾られている。

※この数日後、今西の元に亀嵩町の桐原老人から一通の手紙が届く。

それは、三木謙一が助けた乞食の親子の件で、今西が気になり、

その出生地を尋ねた返信である。

※今西は係長の許可を得て、乞食の親子の本籍、石川県上沼群大畑村へ向かう。その乞食の親の名は本浦千代吉、子の名は秀夫である。

109 石川県 ある峠の頂上

今西が眼下を見下ろしている。

三方を山に囲まれた、僅かな山間の村。

今西、峠から村への道を歩き出す。

112 山肌の農家

家の中、少し暗い。

今西、土間に立っている。

本浦庄治の妻お妙（千代吉の弟の息子の結婚相手）、昼の支度の籠に火を入れている。

今西「本浦千代吉さんの本家ですね（念を押す）」

お妙「そうです（その表情には少し警戒心がある）」

今西「私は千代吉さんと大変懇意にしていた者ですが、山温泉まで参りましたので」

お妙「そうですか（少し警戒を解き）ま、どうぞ」

上がり框に薄い座布団を押しやる。

今西「どうも突然お邪魔しまして（と腰を下ろす）」

お妙、茶を淹れようとす。

今西「いやいや、そんなお構いなく……ところで千代吉さんは、奥さんのことをなかなか話しませんでしたが、奥さんは一体どうなされたんですか？」

お妙「死にました」

今西「ほう」

お妙「ふ・さ・さんふじつは千代吉さんと別れて……不実なようだけど事情が事情ですし……金沢へ出て料理屋の女中奉公じよちゆうほうこうをしておりましたが……あれは金沢へ行って三年ぐらいでしたかねえ」

今西「じゃ、息子さんの秀夫さんは？」

お妙「秀夫は千代吉さんが、男手一つで育てておりましたけど」

今西「秀夫さんは、今でも時々この村へは？」

お妙「いいえ、千代吉さんが連れて一緒に出て行ったきりですね。二人が村を出たのは……確か、昭和十七年の夏でした……村中の者に選別せんべつを貰うて、千代吉さんが三十六、秀夫はまだ六つか、七つでしたねえ」

122 東海道線・米原駅

タイトル

《今西は石川県の出張を済まし、東京ではなく、或る男の戸籍調査のための大阪へ向かった》

124 大阪市・浪速区・浪速区役所・内部・戸籍係

今西、戸籍簿と自分の手帳を照合している。

今西「この戸主の和賀英蔵さんと、妻の克江さんですが、死亡月日が同じですね」

係員「(覗き込み読む)昭和二十年の三月十四日、ああ、空襲ですね。

この辺あたり一带が丸焼けになったそうですから」

今西「……ああ、空襲ですね」

係員「……あの、何か」

今西「いや、その……仕事の関係上、戸籍原簿は時々見せていただくところがあるんですが、これは紙がちよつと新しいですね」

係員「ああ、前のは空襲で焼けましたから」

今西「(はつとする)焼けた!?!……するとこれは法務局の写しを取ったものですか？」

係員「いや、法務局の方も焼けてしまっております」

今西「すると、こう言う場合には、何なんに基もといて、この原簿を作るんです

か？」

係員「本人の申立てですね」

今西「本人の申立て？」

係員「(頷く)戦災で原簿が焼けてしまった場合には、本人の申立てで本籍復活ふっかつという手続きが取られます……これは法律的に認められております、はい」

126 賑やかな商店街

店の前で五十がらみの主人と今西。

主人「あすこですよ、あすこ(筋向いの建物を指さし)あの角に煙草屋

がありますね」

今西「はア（頷く）」

主人「空襲で焼ける前はあすこで自転車屋をやっていたんです、小さな自転車屋ですがね」

今西「自転車屋さん？」

主人「私達は早めに疎開したからよかったです……英蔵さんもおかみさんも本当にいい人だったんですかね」

今西「しかし、ご夫婦が亡くなられて、よく子供さんだけが助かりましたね」

主人「子供？」

今西「はい」

主人「変な顔をする）子供はいなかったですよ」

今西「え、子供はない!？」

主人「ええ、夫婦の他には小さな小僧さんが一人……ま、店員さんですな、可愛い子で……夫婦共まるで自分の子供のように可愛がっておりましたね」

127 東京・あるマンション

男がピアノを弾いている。

——懸命に、まるで憑かれたように叩いている。

(F・O)

(F・I)

128 警視庁・会議室

捜査一課長、係長以下捜査本部全員が出席し、捜査会議が行われている。

今西「本年六月二十三日に発生しました、かまたそうしやじょうない国鉄蒲田操車場内殺人事件の重要容疑者として、なにわくえびすちよう本籍、大阪市浪速区恵比寿町一ノ一、たいほじよう現住所、おんでん東京都渋谷区恩田三ノ五の和賀英良わがえりように対し、せいきめういた逮捕状を請求致しました」

129 RCBホール

次々と詰めかけている入場の人達。

入口にポスター

【和賀英良 新作発表会

オーケストラとピアノのための

『宿命』】

130 同ホール・控室通路

懸命にピアノを弾いていた男が歩いて来る——和賀英良である。

二、三の記者が駆け寄り、フラッシュが光る。

131 警視庁・捜査会議

今西「先ず本件の犯行に関し、殺害された被害者、三木謙一の事情から述べます。(書類を手に取り) 同人は大正十二年島根県警察に巡査として奉職しまして、昭和二十三年に依願退職、その後は郷里の岡山県江見町で雑貨屋を営み、養子を迎え、平和な老後の生活を過す境遇にありましたので……本年の六月、念願の伊勢参宮を兼ねた関西旅行を思い立ち、六月十日に江見町を出発、岡山、琴平、大阪、京都とのんびりした旅を続け、六月十九日に伊勢二見浦の扇屋旅館に投宿いたしました……ところが、彼が伊勢に着いてから、急に、まるで予定のなかった東京行を思いついたのであります」

132 RCホール・化粧室

和賀、タキシードに着替えている。
傍らに和賀の婚約者佐知子がいる。

133 警視庁・捜査会議

今西「なぜ三木謙一が急に東京へ行く気になったのか……同人の伊勢における挙動で、我々に不審の念を起させる点は、唯一つしかありません。それは旅館に近い映画館、ひかり座に、二日も続けて出かけていることでもあります……私は最初上映されている映画の中に、誰か思いがけない人を見出したのであろうと思いましたが。ところが、同ひかり座では最初の日と、次ぎに出かけた二度目は、違った映画を……つまり、彼の関心は、上映されている映画ではなかったのであります」

134 伊勢——ひかり座

今西、支配人に送られて事務所から出て来る。
その重苦しい顔。

支配人「どうです。映画でも一寸覗かれたら」

今西「(ぼそっと) 帰る時間の都合もありますから」

支配人「今から東京へ？」

今西、頷き、売店により煙草を買う。

支配人「ええっと、今からだ……」

売店の横の壁に貼られた時刻表を見て、

支配人「十四時四十七分はもう間に合わないし……そうだな、バスで伊勢まで出て、近鉄で名古屋へ出た方が、新幹線の連絡が？」

支配人、変な顔をして振り返る。

さつきから今西が妙に固くなっている。

今西——時刻表ではなく、その上の写真を見ている。

額縁に入った大きな記念写真と目立つ但し書き——『田所先生の御家族と共に』

支配人「(気づいてニヤツと) ああ、それですか」

今西「これは前大蔵大臣？」

支配人「ええ、田所さんは三重県の出身ですから、選挙の時にはウチの社長の参謀長で……いや、もつともこれは自称の参謀長ですがね、ハハハ」

135 捜査会議

捜査本部達、それぞれ写真を手にかけている。

今西「後日、伊勢署に依頼して、写しを焼き増したのが、お手許の写真で、下に説明書があります。(読む)左より三和興行社長、ひかり座の林善之助、前大蔵大臣田所重喜氏、同夫人、令息康彦氏、令嬢佐知子氏、右端が田所氏の後援している音楽家、和賀英良氏、括弧して令嬢の婚約者となっております」

一同、シーンとなつている。

今西「三木謙一が感慨深く眺め、翌日再び映画館を訪れて確認し、遂には突然の上京にまで到らせたのは、館主の林氏でもなければ、またこの田所一家でもなく、この右端にいる……和賀英良であります」

136 RCBホール・控室

佐知子「いよいよ生れて来たこと、生きていることね」

和賀「(ニツコリ) ああ」

佐知子の父、田所重吉(前大蔵大臣)が顔を出す。

田所「やア、おめでどう、おめでどう、大変な盛況だね」

和賀「ありがとうございます」

和賀が田所から花束を受けている。

ポーズの注文をするカメラマン達。

フラッシュ、フラッシュ。

スピーカーから開演五分前のアナウンス。

137 捜査会議

今西「かくして三木謙一は六月二十一日に伊勢を夜行で出発し、二十二日東京に着、直ちに和賀に連絡をとりました。ところが、和賀にとつては、この三木謙一は会いたくない、絶対に会いたくない人物でありまして、連絡を受け仕方なく会っているうちに、殺意を生じ、且、それを実行に移したのであります」

係長「では今西君……本件の容疑者、和賀英良の犯行容疑を」

今西に全員の視線が集まる。

今西「先ず、和賀の身分出生から申し上げます」

机の書類から一通の戸籍謄本を取上げる。

今西「本籍は、大阪市浪速区恵比寿町一丁目一番地、父和賀英蔵、母克江となつておりますが、しかしこれは和賀の創作でありまして、事實は彼は同家の雇人であり、戦後戦災に依る本籍復活の手続きをとつたものに過ぎません。彼の眞の出生は」

もう一通の戸籍謄本を取上げて読む。

今西「本籍、石川県上沼郡大畑村字野中十二番地……父は本浦千代吉、母、ふさ、その二人の間に出生した彼の本当の名前は本浦秀夫、出生月日は昭和十二年三月十七日であります……ところが本浦秀夫が三歳の時、父の千代吉が病気になった為、母のふさは同家を去り、以後は父の手一つで育てられておりましたが……昭和十七年の夏、父親の千代吉はこの生れ故郷を捨てて旅に出て行きました。当時六歳の秀夫の手を引き……村を出て行ったのであります」

147

RCBの大ホール

和賀、ピアノの傍らに立っている。

その和賀を注視しているオーケストラ全員。

シーンと静まり返っている場内。

宙を睨んでいる和賀の眼。

148

捜査会議

今西「彼に母親を去らせ、そして彼等二人に故郷まで捨てさせたものは何でありましょうか、それは父千代吉の病気……当時としては、不治の病と言われていた、癩病であったのであります」

※和賀の指揮するオーケストラの演奏が始まる。

150

石川県上沼郡大畑村

三方を山に囲まれた僅かな村の眺め。

そこに巡礼姿の親子が立っている。

かつて今西がそこにいたあの峠の山頂である。

貧しい荷物を背負い白い巡礼姿の本浦千代吉とその手に引かれた六歳の秀夫が無限の悲しみを堪えた眼で生れ故郷の村をじっと見下ろしている。

——莊重な【宿命】の曲が始まる。

151

捜査会議

今西、何も言わない。

じっとその今西を見守る一同。

今西「この親と子がどのような旅を続けたのか、私にはただ想像だけで

……それは、この二人にしか解りません」

・北の冬——白い雪の平原を千代吉と秀夫が行く。

・山寺の縁の下——親子は抱き合い厳しい寒さを堪えている。

155

く165親子の悲しくも酷い……転転流転の旅が続く。

165

木次線・亀嵩駅の前

乞食の親子が全身ほこりにまみれてやって来る。

166 捜査会議

今西、机の上の書類の束を取上げる。

今西「これ以後の出来事は、島根県警三森署に保存されている三木謙一の駐在所日誌、同一括書類、島根県衛生部の保存書類、並びに亀嵩村史に依る記録で……その他は当時を知る村民の供述によるものであります」

171 神社の石段

三木、駆け上がって来る。

172 拝殿の縁の下

乞食の親子に対して村人からの苦情を聞き三木が彼らを捜していたのだ。

(乞食の親子は空腹を満たすために畑を荒らしていたのである) 土の上に供物(親子が食べたのであろう)が転がっている。

親子はおびえ痩せ衰えた身体を寄せ合っている。

その親子の眼が三木に向けられる。

三木、思わず息を飲む。

174 捜査会議

今西、書類を読んでいる。

今西「『同人ノ病状ニ驚キ、駐在所ニ連行、事情聴取ノ上村医村上重信氏ノ診断ヲ求メ、直チニ本署ニ連絡ノ上、本籍照会、事後ノ処置ニツイテノ指示ヲ仰グ……』普通なら職権で管轄地域を追っ払うのが常套手段でありましょうが、真面目で、人情味の厚い、三木巡査は決してそのようなことはいたしませんでした」

175 駐在所

千代吉、秀夫が並んで座っている。

千代吉は恐縮してオドオドしている。

秀夫の前の机に心尽くしの饅頭が二つ。だが手をつけない。

三木「石川県上沼郡大畑村だな」

千代吉「へえ」

三木「国を出たのはいつだ？」

千代吉「二年前の夏です」

三木「どこかで医者に診て貰ったことは？」

千代吉「いえ、そんな……」

三木の妻が心配げに秀夫の様子を見ている。

176 欠番 178 捜査会議

今西「本籍照合。県警衛生部の指示にはかなりの時間がかかる。病人の隔離の必要を強く感じた三木は、村役場と相談の上取り敢えず千代吉を村内の隔離病舎に入れました……子供の秀夫は駐在所に於いて、保護面倒を見たとあります。約一週間後、石川県の本籍地より、同人は本浦千代吉、及び長男の秀夫に間違いないとの回答があり、それから数日後、県の衛生部より、国立療養所に入所させる旨の指示が届き、八月二十一日に、岡山県の光風園より係員が千代吉を受け取りに参りました」

179 亀嵩村の隔離病舎の一室

三木「別れたくない」

千代吉、頷く。

三木「秀夫とはどうしても別れたくないんだな」

千代吉「(強く)はい」

三木「じゃ、もし秀夫に病気が感染したらどうするんだ」

千代吉、頑とした顔つきになり黙りこむ。

三木「(思わず声を上げ) 病気の感染の危険だけじゃない。これから成長する秀夫の将来に、お前はこれまでのような状態を続けていいと思っっているのかッ!!」

強い衝撃にギクツとする千代吉。

三木「……本浦、よく考えてみい……なッ」

180 斐伊川の河原

草むらに小さな砂の器が一つ。

秀夫——河原で、黙々と小さな器を作っている。

184 何かを秘め無心に演奏を続ける、和賀。

181 千代吉は秀夫と別れて施設に入ることなかなか承知しなかった。しかし、三木の諄々とした説得により秀夫と別れ亀嵩村を出発する。

193 捜査会議

今西「三木は取り残された秀夫を保護しながら、養育してくれる篤志家を捜しました。しかし、父親の病気が病気だけに引取手がなく、最後に子供のない三木巡査は、秀夫を自分の子供として育て上げる決意までしたようであります」

194 三木夫婦は慎ましくも秀夫を大切に育て始める。

195 捜査会議

今西「これほどの夫婦の愛情にもかかわらず、放浪癖が身に着いてしま

ったのか、或いは父親を慕ってその後を追ったのか……」
——秀夫は三木夫婦の元を去る。

197 三木は狂ったように秀夫を捜す。

三木「秀夫！ 秀——夫——ッ!!」

——ピアノを弾き、指揮を執る、和賀。

「秀夫——ッ！」

三木の声が彼の胸に響いているのか……。

199 捜査会議

課長「どういう経路を経たのか分からないが、失踪した本浦秀夫が、とにかく大阪へ出て、和賀英蔵に拾われて店員になった、そういうことだね」

今西「そうです。昭和二十三年に到って、戸籍面の創作により和賀英良になりました。以後の経路は一括書類の通り明瞭で、その後苦学して京都府立一中を卒業、その後は東京に出て、芸術大学の烏丸教授に天分を見い出され、今日を成した、と、いうことになります」

課長「和賀英良としては、順風満帆、まさに輝くような人生の途上にある。そこへ想いもかけない三木謙一が現れた……コロシの動機は、自分の生い立ちや戸籍詐称までバレる、こういうことだね」

今西「いやいや、その点は和賀の自供に待つより仕方がありませんが、こういう推察は成り立ちます。三木は軽々しく和賀の前身を口外するような男じゃない。しかし、彼としてはどうしてもその過去の重要な問題にふれざるを得なかったのであります」

手帳を取り出し開く。

今西「伊勢二見浦の旅館、扇屋の主人の証言に依りますと、三木謙一は伊勢を夜行の二十時三十五分に乘っております。この汽車が東京に着くのは朝の六時十分……彼は電話帳、その他の方法で、和賀に連絡したものだと思われれます。彼等二人は直ぐに会ったのです」

一同の視線が今西に集まる。

今西「蒲田のバー・ロンでの出会い、これは二度目であると思われれます。ではなぜ二度目の出会いまで作ったか……それは三木が和賀に対し、余命いくばくもない父親、本浦千代吉に会うことを、強く希望、いや、主張してやまなかったからであります」

課長「なに？ 本浦千代吉が生きている!?!」

一同、息を飲んで今西を見つめる。

今西「はい」

200

瀬戸内海

ぼっかりと浮かぶ島。

タイトル

《国立療養所 光風園》

201 同・一室

老いさらばえた本浦千代吉が車椅子で運ばれて来る、

今西「……本浦千代吉さんですね」

千代吉「……はい(やっと声が出る)」

今西「突然お邪魔したのは他でもありませんが、こういう人をご存知かどうかと思ひまして」

今西、ポケットから和賀の写真を取り出し、机に置く。

千代吉、写真を手に取り、じいーッと見つめる。

息を殺している今西。

千代吉の眼へ身体の全神経が集中する。

千代吉、歓喜とも悲哀ともつかぬ凄まじい唸り声を上げる。

千代吉「ウー——ウー——ッ!!」

※千代吉は写真の人物を秀夫と認めようとはしない。

今西「こんな顔の人は知らない」

千代吉「は、は、はい」

今西「見たことも、会ったこともないんですね」

千代吉「……はい」

今西「では、これに似た人……例えばあなたをよくご存知で、六つか七つの子供を青年にしてみたら、それでも心当たりはありませんか」

千代吉「アッア——ッ!!」

千代吉は泣く。悲痛に五体を震わせ、波打たせ激しく慟哭する。

千代吉「そ、そんな人、知らねえ……ア——ッ!!」

205 RBC大ホール

和賀の頬に涙が流れる。

その和賀の耳へ、哀願、訴え、執拗なまでの三木の声が迫って来る。

『秀夫、なぜだ、どうしてなんだ……会えば今やりかけてる仕事が出来なくなるなんて、何でそんなこと言うんだ。わしには分からん。たった一人の親……それもあんな思いをしてきた親と子だよ! わ

しはお前の首に縄を、縄をつけても引つ張って行くから来い一緒に、秀夫!』

206 捜査会議

今西「担当医師、および主任看護婦立会いのもとに、千代吉の私物を点検いたしましたところ、来信が五十通出て来まして、これを押収致しました。これらはみな三木謙一よりのものでありまして、他の者からの手紙葉書の類は一切ありません。つまり、千代吉にしましては、三木謙一だけがこの世で通信を交わしているただ一人でありました。これに依りますと、三木と千代吉の文通は約二十四年間……三木が警官を退職し、岡山県江見に帰った現在まで続いております。その内容は殆ど千代吉の一子秀夫に終始しており……秀夫は今どこにいる……死ぬまでに会いたい、一眼だけでも会いたい……千代吉はただただ

そのみを書き綴り、三木はまた、あなたの息子は見どころのある頭のいい子だから、きつとどこかで立派に成長してらるろう、そしてそのうちに必ず、必ずきつと会いに来るにそういない……繰返し繰返し、繰返し繰返しこのようになぐさめております」

207 RCB大ホール

和賀、ピアノを弾いている。

オーケストラは最後のクライマックスへ……。

208 同・表玄関

警視庁の車が着く。

今西、和賀英良の逮捕状を手に降りて来る。

210 同・地下の階段

吉村「今西さん……和賀は本当は父親に会いたかったですよね」

今西「そんなことは決つとる！（不機嫌を通り越している）いや、彼は今父親に会っている……彼はもう音楽……音楽の中でしか父親に会えないんだッ!!」

× × × × × ×

全身でピアノを叩き続ける——和賀。

× × × × × ×

和賀を見つめる、今西と吉村。

× × × × × ×

演奏が終わり、爆発するような観客の拍手と歓声の中、立ち上がる、和賀。

——ただ一人真空の中に佇んでいる、和賀。

タイトル

《ハンセン氏病は、医学の進歩で特效薬もあって、現在では完全に回復し、社会復帰が続いている。それを拒む者は根強く残っている非科学的な偏見と差別のみで、本浦千代吉のような患者は、もうどこにもいない——しかし、》

211 親と子の旅

タイトル

《たとえどのように旅の形は変わっても、親子の【宿命】だけは永遠のものである》

完